医薬品間や医薬品と食物

㈱広貫堂　蛭谷　峰男

有害反応（Adverse reaction）

有害反応は、WHO（世界保健機関）によると、次のように定義されます。

「疾病の予防、診断及び治療の目的であるいは生理的機能を変化させる目的で人体に通常使用される量において発現するあらかじめ意図していなかった有害な反応のこと」です。

しかし、有害反応のなかにはいわゆる過量毒性と考えられるものを含めることもあり、薬用量の範囲内で発言する有害反応に限定されるものではなく、一般に広く有害な反応をさすものと考えられます。

有害反応はさらに次のごとく分類されます。

①過量毒性　②副作用　③特異体質　④過敏症　⑤薬物相互作用　⑥乱用毒物

過量毒性…その薬物が持つ既知または未知の薬理作用が容量の増加に応じて誇張されて現われ、それが人体にとって有害で、時には生命の危険を伴うものをいいます。

副 作 用…これは治療目的以外の、望ましくない薬理作用によって起こる薬物反応です。抗生物質によって起こる下痢、悪心、嘔吐や、アスピリンによる腫瘍形成は副作用である。

特異体質…遺伝学的・発生学的原因によって、薬物異常反応を起こすときに特異体質という。個体差による異常反応とか過敏症はこれから除外される。遺伝的にグルコース－6－リン酸脱水素酵素を欠如した赤血球を有する種族またはヒトは、抗マラリア薬、解熱薬などにより溶血性貧血を起こす。

過 敏 症…薬物の反復投与による有害反応、薬物相互作用は併用による毒性であるので別に述べる。

相互作用

アルコール類と一緒に飲むと効きすぎて危険な薬

○精神安定剤

・ジアゼパム（セルシン、ホリゾンなど）※副作用…薬物依存や幻覚、妄想などの禁断症状

・クロルプロマジン（ウインタミン、コントミンなど）

・ハロペリドール（セレネースなど）

○催眠剤

・フェノバルビタール（フェノバールなど）※副作用…薬物依存や幻覚、妄想などの禁断症状

○抗うつ剤

・塩酸イミプラミン（トフラニールなど）※眠くなったり、注意力が低下したりする。

糖尿病用薬と一緒に飲むと低血糖を起こすおそれのある薬

・糖尿病薬（インスリン製剤、スルホニル尿素系薬剤、ビグアナイト系薬剤）

○解熱鎮痛剤（サリチル酸系）

・アスピリン※副作用…食欲不振、悪心、嘔吐などの消化器症状、肝障害、過敏症

納豆（ビタミンＫ）と一緒に服用すると効果が減弱する薬

○抗凝血剤

・ワルファリンカリウム（ワーファリン）※副作用…腎障害に与えると肝障害を併発

グレープフルーツジュースで飲むと作用が増強される薬

○高血圧薬（カルシウム拮抗剤）

・ニフェジピン（アダラート、セパミット）※副作用…発疹、結膜炎などの過敏症白血球減少など

注

スルホニル尿素系薬剤（ＳＵ剤）

…インスリン分泌を促進する経口血糖降下剤

（毒性、副作用が少なく比較的安全に用いられる

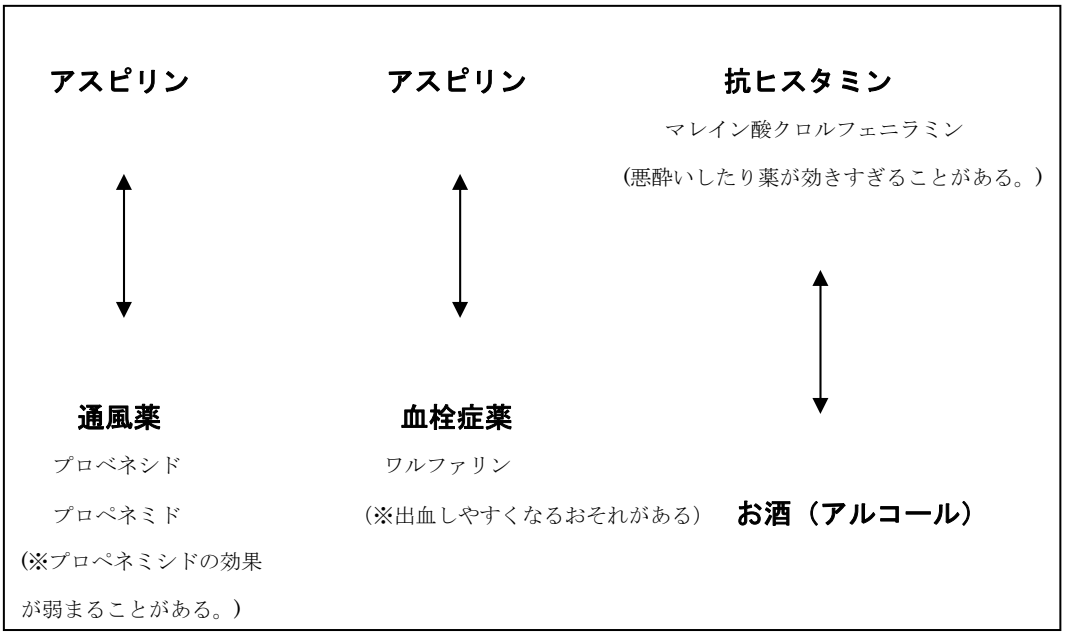
・トルブタミド（ラスチノンなど）

・クロルプロパミド（ダイヤビニーズなど）

・グリペンクラミド（オイグルコン、ダオニールなど）

・ビグアナイド系薬剤（ＢＧ剤）…インスリン分泌を促進する経口血糖降下剤（肥満を伴う軽症糖尿病にＳＵ剤のみでうまく血糖が下がらない場合にＢＧ剤が併用される）

その他相互作用



昔からお酒をよく飲む人は、「麻酔がかかりにくい」とか、「薬が効きにくい」と言われています。その一方では、お酒とかぜ薬を一緒に飲むと「薬が効きすぎた」などということもあります。日ごろよくお酒を飲む方は、酔っていない状態でも肝臓の代謝能力が高まっているので、薬を飲むと肝臓で早く代謝されてしまい、効果が減弱することがあります。

このような場合、一般に肝臓の薬物代謝系が抑制され、薬の効き目が強くなることがあります。薬とお酒は一緒に飲まないことが原則です。

アルコールを普段よく飲む方には効果が減弱する薬

・抗凝血剤ワルファリン

・血糖降下剤トルブタミド　※トルブタミドはお酒と一緒に飲むと逆に作用を増します。

薬（鉄剤）を緑茶や紅茶で服用した場合

鉄欠乏性貧血で鉄剤を緑茶や紅茶で服用した場合、緑茶や紅茶に含まれるタンニンは鉄と結びついて吸収を低下させると考えられ、留意したほうが良いとされている。

しかし、一般的な量と濃さの緑茶や紅茶などのタンニン含有物は鉄剤である硫酸第一鉄やクエン酸第一鉄ナトリウムなどの鉄吸収を若干抑制するが治療効果に大きな影響を与えないので禁止する必要はないとされている。（その理由として鉄欠乏状態では鉄の球収能が亢進（こうしん）していることや、一般的に緑茶や紅茶などに含有されているタンニンと結びつく鉄の量に比較して一回服用量の鉄剤含まれる鉄の量が多いとこによるとされている。）

食品などとアセトアミノフェン

○糖分の多い（あんやクラッカー）あとアセトアミノフェン

あんやクラッカーに含まれている糖分とアセトアミンフェンが結合し、薬の吸収が遅くなり、薬効が減弱。

○アルコールとアセトアミノフェン

アセトアミノフェンの吸収が早まり、薬効が増強。肝臓に属性のある活性代謝物を生じ、肝機能障害を起こすこともある。

○タバコとアセトアミノフェン

タバコの成分（多環芳香族炭化水素）がＵＤＰグルクロノシルトランスフェラーゼを誘導し、薬効の時間が短くなる。

食品などとアスピリン

○コーラとアスピリン

飲用により消化管内の pH が変動し、薬効発現が遅延。

○アルコールとアスピリン

胃の中でアルコールデヒドロゲナーゼの働きが低下し、アルコールの吸収がよくなるため悪酔いしやすい。また胃が荒れる。

○タバコとアスピリン

血小板凝集機能を高めるので、アスピリンの作用を減ずる。

薬とセントジョーンズワート

厚生労働省は2000年にセントジョーンズワート含有食品と、医薬品との併用について注意を喚起する文章を発表した、免疫抑制剤や経口避妊薬、強心剤、抗ＨＩＶ薬とともにセントジョーンズワートを摂取すると、こうした医薬品の血中濃度が低下して、医薬品の降下が減少することがわかった。

セントジョーンズワートによるチトクロームＰ４５０の活性化による代謝が促進され、血中濃度の低下するおそれのあるものとして、厚生労働省が注意を喚起した医薬品リストには、以下のものがある。

アミノフィリン、アンプレナビル、エチニルエストラジオール・ノルエチステロン、エツニルエストラジオール・レボノルゲストレル、エファビレンツ、塩酸アミオダロン、塩酸アミトリプチリン、塩酸プロパフェノン、塩酸リドカイン、カルバマゼピン、ゲフィチニブ、コリンテオフィリン、サキナビル、ジギトキシン、シクロスポリン、ジギキシン、ジソピラミド、臭化水素酸エレポリプタン、ジンバスタチン、タクロリムス水和物、テオフィリン、ネビラピン、フェニトイン、フェノバルビタール、メシル酸ネルフィナビル、メチルジゴキシン、リトナビル、硫酸イソジナビルエタノール付加物、硫酸キニジン、ロビナビル・リトナビル、ワルファリンカリウムー等々。

こうなると、このセントジョーンズワートは単なる健康食品ではない薬草（medical herb）であるとの思いがする、くれぐれも上記以外でも併発するときは、医師と相談してください。また、医薬品の抗うつ剤との併用は危険なので、避けなければならない。

セントジョーンズワートとの相互作用を起こす薬物

免疫抑制薬	シクロスポリン、タクロリムス水和物
気管支ぜん息治療薬	テオフィリンなど
抗てんかん薬	フェニトインなど
強心薬	ジゴキシンなど
抗不整脈薬	ジソプラミドなど
抗ＨＩＶ（ヒト免疫不全ウイルス）薬	硫酸インジナビルエタノール付加物 ネビラリンなど
経口避妊薬	エチニルエストラジオール ノルエチステロンなど
血液凝固阻害薬	ワルファリンカリウム
抗うつ薬	塩酸アミトリプチリンなど